

研究報告

当文学部関係教職員、本学年度刊行の著書を対象

尾形裕康 著

書 評

『学制成立史の研究』

石田 加都雄

一
尾形博士には、このたび、「学制」の成立に関する多年の研究成果を一千ページに近い大著「学制成立史の研究」として公刊された。博士は、すでに「学制」に関する研究の成果を「西洋教育移入の方途」および「学制実施経緯の研究」として世に問われており、今回の著書とあわせ、「学制」研究の三部作としている。

「学制」は、わが国に近代教育制度がたてられた最初の教育法であって、わが国の近代教育を明かにしようとすれば、まず、「学制」を明かにするところから着手しなければならない。ところが、最近まで、「学制」に関する本格的な研究がほとんどだされていない。おもえば不思議なことである。博士の「学制」に関する三部作は、この意味で高く評価されるものである。

「学制」は、明治の近代的諸制度同様、欧米先進諸国の教育制度の模倣とみられてきた。もちろん当時の日本は、政治、経済、文化等、諸般にわたって欧米の文化を導入し、近代国家として再生しようとしたのであるから、近代教育の根本法制である「学制」も、欧米に範をとったことは言うまでもない。

「学制」の欧米模倣の面を、博士は、さきの二著書で明かにしている。従来の研究は、「学制」の西洋模倣の面だけに着目していたが、博士の研究は、これで満足しなかった。さらに、まったく別の面から「学制」を追求した。それは、わが国に、「学制」を成立せしめるだけの素地がすでにあったという点である。すなわち、「学制」にあらわれている近代教育の思想は、すでに近世中葉以来明治にはいつてからはますます強く、官民識者の間に唱えられてきたところであり、近代的教育制度を要望する建白も数多く出されていた。この面から「学制」の成立を明かにしようとしたのが本書である。最近では、研究者の間によく「学制」のたんなる西洋模倣説は反省され、「学制」に関する研究において、日本の側の素地の面から迫ろうとする気運があらわれてきたが、管見ではあるが、この面からの本格的な研究は、今回の博士の業績を置いて他にほとんどみない。博士の、このような遠見は、博士が、たんに特定時期の教育史の研究者でなく、近世は言うまでもなく、日本教育史全体に通暁している研究者であるところからきている。

さて、このような、尾形博士の大著「学制成立史の研究」を十二分に論評す

ることは、限りある紙数では容易でないから、今回はただその内容を紹介するに止めよう。

二

本書は、第一部立論編、第二部立証編および第三部資料編の三部から構成されている。この三部構成は、本書独特の編集様式で、博士の他の著書にも、このような編集様式はない。立論編が本書の主論文であり、立証編は、主論文を展開していく上に重要な論証、あるいは、他の一般の論文では、補注にあたる性質のものから成っている。ここに収録してあるこれらの論証および補注とみられる論文、一つ一つが、本文に繰り込めるような簡単なものでなく、それぞれ独立した貴重な研究成果である。本書ができ上るまで、多年にわたる地味な綿密な研究が続けられてきたことをうかがうに足りる論文ばかりである。この部分を立証編として独立させた博士の意図が、筆者にはよく理解できる。

資料編を主論文の後に、付録のようにつけた著書は多くある。しかし、それは、使用した資料のうち、主要なものを読者の参考に使しようとするものである。それが、本書では第三部として独立させている。ここには、博士が、長年にわたって精進した貴重な資料が多数収められており、資料編を付録とはみず、本書を構成する支柱の一つとみていると推測することができる。

三

さきに記したように、尾形博士は、「学制」の成立を欧米模倣とは別の面、わが国に、それを成立せしめるだけの素地がすでに醸成されていたことを論究し、それを本書で明かにしようとした。そして、その素地を西洋文化の摂取という点でとらえ、近世中葉以降にあらわれた動向を第一部立論編で明かにしようとした。

その要旨は、つぎのようにまとめることができる。わが国において、すでに、近世中葉識者の間に西洋文化摂取の気運があらわれ、これが教育の近代化への努力、新教育制度に対する要望を付随した。時代がくだるに従い、その動向は活発となり、幕末、ペリーの来航を機に一段と切実さをまし、「学制」制定の頃には、教育の近代化断行の気運がすでに熟していた。この要旨が、第一章序説、第二章五箇条の誓文、第三章「学制」制定の背景、第四章教育に関する建白という構成で、公正な論証と豊富な資料を以て、客観的、具体的に詳論されている。

その内容について詳細に紹介する余裕はないが、「学制」を明治元年、国是として表明した五箇条の誓文の教育上の具現とし、第二章で五箇条の誓文をとり上げ、公議制の採用、西洋文化摂取の奨励等にあられたその近代的性格を指摘するとともに、それが日本人の手によって作成されたものであることを述べ、起草者の思想を、彼等のうけた教育をとおして明かにしている。起草者は、三岡八郎（由利公正）、福岡孝弟、木戸孝允の三人であるが、三岡は橋本左内、横井小楠、福岡は吉田東洋、木戸は吉田松陰、斎藤篤信齋、江川太郎左衛門らの薫陶をうけた。このように、彼等の師の多くは洋学に造詣深く、海外事情に関心の深かった有数の進歩的学者であった。かく起草者とその師について詳述することによって、五箇条の誓文にあらわれた近代的思想が、幕末期の識者にもたれていたことを明かにしている。

第三章では、「学制」制定の背景として、近世中葉以降擡頭してきた洋学摂取の動向、教育機関における洋学教授の採用、幕末における洋学、国学、儒学の消長および近世中葉から明治初期に至る間に世に出た海外関係の文献の四つの角度から、西洋文化摂取の気運が早くからおこり、識者の間に大きな影響を与えていた事情を明かにしている。このうち、教育機関における洋学採用の動向については、教育機関を幕府直轄の学校、藩校、私塾に分け、それぞれにつ

いて博士が作成した克明な表および統計をもって詳述している。

第四章では、近世中葉以降明治初期に至る間に行なわれた教育の近代化を要望する建白を多数あげ、明治にはいつて、にわかに近代教育が生れたのではなく、「学制」に示された近代教育に対する考えが、早くからあったことを明かにしている。これらの建白は、第三部資料編Aに収められているが、宝暦年間に提出された集堂安左衛門の建白から明治五年の御雇教師ドイツ人ホフマンの建白まで四十四にのぼっている。

第一章序説でたてられた仮説、すなわち学制を成立させる近代的思想および近代的教育思想が、わが国ではすでに醸成されていたという説は、第二章以下の、立証編および資料編とあわせてたどっていった時、論証の確実さ、論理の透明さから、もはや仮説ではなく、事実であることを知らされる。

四

第二部立証編は、十三の論文から構成されている。本編は、第一部立論編の論旨を展開するにあたっての論証の体裁になっていて、事実、立論編の文中の随所に論証としてあがっている。その一つ一つは、論証の役割を果たすにとどまらず、それぞれが、独立した貴重な研究成果である。研究過程からみれば、多年にわたるこのような研究業績の累積から、立論編で示された卓越した論旨が生れたと言える。

さて、立証編の構成は、第一徴士貢士制、第二皇漢洋三学派の抗争、第三皇漢両学所の実態、第四日本近代化の父フルベッキ、第五明治初期海外留学制成立の経緯、第六明治の学制と新島襄、第七わが医学教育近代化推進のホフマン、第八ホフマンの教育建議、第九幕末明治初期の新聞雑誌、第十明治前期の翻訳教育書、第十一明治前期の翻訳社会科学書、第十二明治の教育箴指令、第十三明治前期産業技術の発達と御雇教師の十三の論文から成っている。

ここに収められた論文の内容を全部紹介する余裕はないが、筆者が啓発された論文について二、三あげておきたい。

第二、第三の皇漢洋三学派の抗争と皇漢両学所の実態は、ともに明治初期における三学派の抗争および消長の経過を明かにしたものであるが、三学派がはげしい抗争の後、やがてある意味での調和が保たれるようになった経緯を具体的に知ることができる興味深い論文である。

筆者は、これまで新島襄を、同志社の創立者として、わが国キリスト教教育界の代表的人物の一人とみ、この面で彼の人物、活動に興味をもってしたが、第六明治の学制と新島襄によって、彼が日本の教育を近代化する上に、深く関与していたことを知ることができ、日本の近代教育の成立に関する新島の役割をさらに研究する必要があると感じた。

第九幕末明治初期の新聞雑誌は、当時の新聞、雑誌が、いかに西洋文化の摂取に重要な役割を果たしていたかを、当時の新聞、雑誌の類を逐一あげて詳述している。近來、教育研究者の間に、無意図教育の重要性が認識され、新聞、雑誌のもつ教育機能に関する研究が行なわれるようになったが、博士が「学制」成立の背景として、この方面にも眼を配って研究された慧眼に敬服する。

このほか、明治前期の翻訳教育書および翻訳社会科学書に関する論文は、当時刊行されたこれらの翻訳書を、ほとんど網羅して、これをあげ、その内容を紹介したものである。これによって、当時の識者が、相当高い程度において西洋の学術を消化していたかを知ることができる。この論文には博士が作成した綿密な表や統計が収められ、後來の研究者に、またとない貴重な資料を提出している。なお第三部資料編Bに、近世中葉以降、明治初期に至る間に刊行された日本人の編著、翻訳になる海外関係の文献が、外国語、社会科学のみならず、自然科学まで、類別、年代順に収録されている。研究者にとって貴重な資料と言わなければならない。最後の論文、明治前期産業技術の発達と御雇教師は、

西洋文化移入の面からみて看過できない論文であるばかりでなく、産業教育史の面からも高く評価されていい地道な論文である。

著者の意をつくし得ない紹介になったが、要するに著者は「学制」研究において、未拓の領域を開拓して金字塔を建てられたのである。元来、博士はわが古代教育を究明して、教育の源流・教育内容説明のカギ「千字文」の研究に四十余年没頭、往年その成果を上木された（この業績に対しては、さきに再度受賞されている）。さらに「千字文」を源泉とするわが教育の展開、とりわけ日本教育近代化の土台になった「学制」の研究を三部作（「西洋教育移入の方途」・「学制実施経緯の研究」）によって集大成された。かく博士が広範囲にわたる画期的な業績によって学界・教育界に貢献されたことは高く評価すべきであろう。

（国立教育研究所・第一研究部第一研究室長）
『学制成立史の研究』（A5版・九六〇ページ・一万円・校倉書房刊）